

国際的な研究・教育拠点としての「美しい学都」を目指して

＜森田ビジョン ー学長就任に際してー＞

2011年4月 教育研究評議会
国立大学法人岡山大学長 森田 潔

- 1.はじめに
- 2.継承と発展
- 3.担い手の形成
- 4.活動理念
- 5.キャンパスの創造
- 6.大学のガバナンス
- 7.結び

1.はじめに

私は2011年の4月1日より、学長の職に就任いたしました。自分の任期期間中に実現したいことを学内外の方々に提示するため、その思いを森田ビジョンという形で公表したいと思います。

本学はすでに中期目標という形で2010年から6年間の目標を掲げ、また2011年度の岡山大学の組織目標を策定しています。この森田ビジョンはこれらの計画の実現を図るという点で基本的に同じ線上にあることは言うまでもありません。しかしこのビジョンは、なおその上に、私の理想とする岡山大学像を提示し、それらの実現にむけての私の決意をより明確にするものであります。皆様におかれましては、理解いただき、大学運営に積極的なご協力をお願い申し上げます。

2.継承と発展

私が掲げる岡山大学像は、以下の言葉に集約されます。

国際的な研究・教育拠点としての「美しい学都」であります。

第1に申し上げたいことは、「学都 岡山」「学都 岡山大学」を継承するということです。岡山大学が中四国の交通・政治・経済・文化の中心に位置することを最大限に生かし、岡山大学をこの地域における国際的な中核的研究・教育拠点にするという構想は、すでに理解され、ある程度達成されつつあるように思われます。

私は、これをより一層深化させるためにこの「学都の構想」を、都市・地域と大学との協力という形で具体化し発展させなければならないと考えます。

学都は、大学だけの力に依って達成されるものではなく、大学が置かれている都

市・地域とともに達成されるという視点を明確にすべきであると考えからであります。世界の多くの優れた知性を惹きつける大学は、大学らしい美しいたたずまいの都市に在ったことは、これまでの欧米の優れた大学の歴史と現実から明らかなことです。岡山大学が、真に国際的な学術拠点として浮上するために、私はこの大学と都市・地域が連繋した新たな「美しい学都」の創設を掲げていきたいと考えます。

3.担い手の形成

伝統から学ぶ

真の知性が参集されて初めて学都が形成される、ということであれば、学都に住まう人々は、深い普遍的知性、科学的な思考の持ち主、気概ある学生、優れた管理運営者でなければなりません。

その点から岡山大学は、善き伝統に恵まれています。古くは、旧制第六高等学校のバランスのとれた人文・社会・自然科学分野での優れた業績と伝統、明治の初年から始まる旧制第三高等学校医学部、岡山医学専門学校以来の高度な医学研究の蓄積、そして近年においても世界的レベルで展開している医療、地域での実践的な教育活動、世界的な環境教育活動の展開、行政や経済の分野で活躍する人材の輩出など、岡山大学は多くの優れた知力と伝統を有しています。私たちは、これらの誇るべき伝統から多くを学び、地域と深く結びついた大学人として、「学都」形成の担い手を輩出しなければなりません。

真の国際化を目指す

岡山大学が真に国際的な研究教育の拠点になるには、今日までの達成は極めて不十分であります。大学の国際化の根源は、大学人の知性が真に普遍性を持つところから来ています。優れた知性は自らの仲間を求めて世界を駆け巡り、知性への渴望は世界の優れた知性の扉を叩く、そうした視点からみれば、岡山大学の現在の水準は、憂うべき状況にあると言わざるをえません。私は、今後、岡山大学を世界に向けて開放し、教員、学生、職員、大学の構成員を可能な限り世界に派遣し、高度な国際化対応能力を付けさせ、さらに世界から可能な限り優れた知性、学生、研究者を岡山大学に呼び込み、岡山大学を世界に向けて創造的な知の成果を発信する大学にしたいと思います。

世界的な大学ランキングの位置において、岡山大学にふさわしい国際的評価を獲得することは重要なことと考えており、ランキング向上のために適切な対応を取るつもりです。

4.活動の理念

学都形成のもうひとつの鍵は、大学人が地域の人々と連携し、地域の人々が世界の人々と連帯するという活動理念を持つことと考えます。「学都 岡山大学」ではなく、

「学都 岡山」であります。

これまで、多くの国立大学は、その人材養成の理念を国家に有為な人材を提供することに重点を置き、一部の領域、医療や地域教育を除けば、大学は地域や地元の都市に深い連繋意識を持ってこなかったと思われます。私は、中央志向でない、地域が自立する事に貢献する大学を作りたいと考えています。地域の人と連携しつつ、地域の善き頭脳となり、地域のための優れた人材養成の場となり、知的に高度な地域サービスを提供する大学を作りたいと考えています。この方向は、大学を地方に埋没させるものではありません。岡山大学を国際的なネットワークの中で、人文社会、環境、自然、医療の分野を包含した国際的なリージョナルセンターを持つ大学に押し上げ、そこから岡山大学を真に個性的な、卓越した大学に作り上げていくことが必要であると考えます。岡山の地にあってこそ世界から人が集まり、世界に輝く大学を作りたいと思います。

5.キャンパスの創造

国際的な美しい学都の創成には、大学のキャンパス自体が、内外に広く開かれた美しいキャンパスでなければなりません。欧米の優れた大学が自らのキャンパスの美化に多大な関心を有しているのも、知の創造の場には、それにふさわしい落ち着きと大学にふさわしい品と美の環境が必要不可欠と考えてきたからです。

幸い、岡山大学は、都市の中心に緑陰豊かな座主川を有した大きなキャンパスと倉敷美観地区の研究所を有しております。優れた美しい、品あるキャンパス創成の可能性は十分に備わっています。さらには、キャンパスの借景となっている半田山や、歴史的遺産豊かな島、緑豊かな吉備高原の農場や温泉場などの優れた特徴を持った大学管理地をも持っています。さらには、一般市民の多く集まる街中での新キャンパス創造も実現したいと思ひます。

美しい、気品のあるキャンパスの創成には、優れた想像力を持った専門家にその設計を託し、時間をかけて計画的に進めることが必要であり、そのようにしたいと思ひます。

津島キャンパスと鹿田キャンパスの2つの大きなキャンパスの大学人が、学都づくりの中で互いに協力しあい、ともに岡山大学の構成員としての連帯感を抱けるようにしたいと考えています。

今日の日から、すべての公的な文書から「津島」「鹿田」という言葉を削除していくことを提案したいと思ひます。我々は同じ美しい「岡山キャンパス」の同一住人であり、一蓮托生、同じ船に乗る乗組員であります。

6.大学のガバナンス

私は大学には、大学固有のガバナンスの在り方が存在すると思ひます。それらは、

1) 大学という知的創造活動に相応しい組織構造と機能の構築、2) 適切な検証と評価システムの構築、3) 経営力の強化、です。

1) 岡山大学に相応しい組織構造と機能の構築

自由・自立と統合

岡山大学が理念と掲げる「知の創成と知の継承」を遂行するためには、私は、まず第1に、教員の自由な活動が保障されなければならないと考えます。古来から、学問の自由、大学の自由が大学に保障されてきたのは故なきことではありません。このことを忘れかけております。他方で、大学は、研究・教育を行う1つの組織であるからには、大学全体を取りまとめる統合的な理念やそれに基づく活動がなければ存立しえないことも自明です。それゆえ、大学のガバナンスは、この2つの要素をどのように活かすかに懸っています。大学は、行政機関でもなく企業体でもありません。大学は大学独自の使命を果たすために最も適した組織を形成するべきであります。大学の活力は、この構成員の自由な気概に満ちた研究教育への意欲に懸っており、大学はそれを保障し、それを大学全体へ統合、組織していかなければならないと考えます。「組織化された自由と混沌」こそが大学の力を最大に発揮する原点であります。

基本的な組織構造と機能

大学の組織は、一定数の教員からなる自立的単位、すなわち学部や研究科から成る統合組織が、入れ子構造をなして大学を構成しています。すなわち、個人は自由な発想に基づく活動を保障されながら、分野、研究室を構成し、一定の自立性を持った分野が部局を構成し、さらに部局が全体の教育研究理念のもとに大学を構成します。

大学全体に責任を負う執行部・役員会は、国やその他の機関からの要請を受けつつ、自立的に自らの方針を決定し、大学全体の統合を図っていきます。

このような縦の組織に、さらにこの組織構造を横につなぐのが全学センターであり、大学全体にかかわる共通に果たすべき機能を担っています。したがって大学センターは固有のミッションを持って活動し、それにふさわしい検証システムを持つことが必要です。

縦と横からなる、このような自立的な大学組織が機能を十全に発揮するためには、その単位、単位の意見の尊重と自立的活動の保証、それをつなぐ情報交換を活発にしなければなりません。部局およびセンターの中核は、大学運営のMiddle層を構成しており、自ら、Middle up, Middle downの意志疎通の体制を作り上げることが極めて重要であると考えます。岡山大学のような巨大な組織を活性化するには、個人の自由闊達な活動と、それを組織化するMiddle層の力が何より重要であり、そのMiddleから信頼されるに足る大学執行部の存在が必要であります。

学部と大学院

岡山大学は、11学部、7研究科から構成される巨大なる組織です。専門職大学院としての法務研究科を別にして、教育学、保健学、環境学は、一つの学部の上にある

研究科であり、その他の社会文化科学、医歯薬学、自然科学の研究科は、それぞれ3つの基幹学部の上に設置された学際的総合研究科です。岡山大学は、このような総合大学院制度を活かして、これまで学際的融合的研究の推進に重点を置いてきました。各研究科で異なる状況下ではありますが、岡山大学は、これを受け入れ、この利点を生かす努力をするべきと考えています。

しかし、大学が社会に対して負う責務の最大の部分が、優れた高等教育機関であるということ、社会が大学を評価する基準が依然として学部に置かれている現実を直視すれば、学部が果たしている重みを十分に考慮しなければならないと考えます。卒業式でどの研究科を卒業したかと同時に、どの学部、学科の基にあったかを表現できない事は大学の存在価値を示せてはいないと感じております。

他方で、大学院の前期・修士課程にはすでに多くの院生が学部の延長として進学しており、研究科が教育機関としての重みを持った存在である部局も存在しています。それゆえ、学問研究の分野に応じて、学部、研究科のそれぞれの存在意義を明らかにし、その役割を明確にすべきであると考えます。

2) 検証と評価

大学の組織が活性化するために、組織の活動状況を常に精密に検証・評価し、それを新たな改革や方針策定に活かしていくことは、決定的に重要です。

また、国立大学法人は、中期目標、中期計画を定め、それに基づいて年度計画を立て、年度毎および中期目標期間毎の達成状況を報告して評価を受ける体制になっていますが、背景も事情も異なる多数の国立大学法人の活動を一律の基準で評価することは非常に困難であり、評価が形式的になっていると思われます。またこうした評価作業が多大な労力を費やしていることも事実です。評価、検証は組織が発展するための手段であり決して目的ではありません。大学人は多様性こそ大切であり、すべての構成員を一律に評価することは明らかに間違っております。我々を最終的に評価するのは、社会そのものであり、文科省でも政府でもありませんし、ましてや執行部ではありえません。適切な検証・評価体制の在り方を常に進化させ、検討していきたいと思っております。

3) 経営力の強化

自立した大学、優れた研究や教育、社会貢献を行うには、確固とした経営基盤が不可欠です。国の運営費交付金の増額に期待できない中で、優れた人、強い学部、将来性のある研究科を伸ばし、最終的に全体が繁栄していくことが重要だと考えます。広く社会からの支持を受けつつ、中央に頼らない、大学全体の経営力の強化に努めていくことが大切であると思っております。我々の大学は我々自身で作らなくてはなりません。

7. 結び

最後に、この森田ビジョンの締めくくりとして、3つのことを申し上げます。

第1は、この岡山という地域、岡山大学という大学が、実に恵まれた状況にあるということです。岡山という地域が風光明媚、好天に恵まれた、安全・安心の地である、私たちの大学がそうした地域の中心に在るということに改めて思いを致し、自らの責務を自覚すべきであると考えます。

第2に、地方に在りながら岡山大学の規模は、他の大都市の大学と比べても遜色のない陣容を持っていること、そして輝く伝統も先輩から受け継いでいること、これからの岡山大学の発展にとっておおきな財産であります。

第3に、時代が岡山大学に期待をし、微笑みかけているという予感がするということです。大学が法人化された今、チャンスは我々の手の中にあります。そしてどの立場に在る人も、地方分権、地域主権等を語り、時代の目指す方向が地域の自立であることを多くの人々が感じていることは確かです。私が森田ビジョンで申し上げてきたことは、明らかに時代の要請に適っていることを確信します。

岡山の地にあって「世界中から人が集まる、日本を代表する独自の総合大学、知と地の創造、美しい学都・岡山大学」を作っていこうではありませんか。